

本日は、降臨節前主日であり、教会の暦で言いますと一年の最後の日曜日になります。本日はこの一年与えられた神の恵みを感謝し、自らの信仰生活を振り返り、来週からの新しい年のスタートの備えをする主日とされています。さきほど読まれましたヨハネによる福音書第18章31節から37節もその内容にそった部分選ばれております。そこには人間の持っている罪と主イエス差を通して示された神の愛と人間への関わりが示されております。

この部分は主イエスが十字架につけられるため捕えられ、行われた裁判の場面であります。このポンテオ・ピラトはローマより派遣された総督であり、当時パレスチナがローマによって征服されておりましたので、総督は最大の権力者であったのです。そして主イエスを十字架につける判決を下したのも、このピラトであります。裁判を見てみますと、主イエスは十字架につかねばならない悪は何もなく、そこにあったのはただ人間の持つねたみ、主イエスによって人気を奪われ、今まで民衆から指導者とあがめられていた人達が主イエスによって一斉に非難され、誇りも何もかも失ってしまった人達のねたみでした。彼らは主イエスに言われたように悔い改めるべきだったのですけれども、最後まで自分を正当化することに固執し、阻害する者は排除する、命を奪うのも厭わない、そのような人間の自己中心性が描かれております。

さらに主イエスを十字架につけるためにそれぞれの人が責任を負おうとせず、責任転嫁を行っていることがわかります。民衆は自分たちが死刑を行う権限がないことを理由に、ピラトに対し死刑の判決を下すことを求めます。ユダヤ人たちは確かに死刑の権限をローマに握られておりました。しかし常にそうしていたわけではありません。時には彼ら自身で石打の刑を執行しておりました。自分たちにとって害のある存在を排除するのに実力を行使することもあったのです。にもかかわらず民衆がピラトに対し死刑の判決を望んだのは、その責任が自分たちに降りかからないためだったのです。あれだけ人々に慕われ、従っていく人が絶えなかった主イエスです。死刑が行われた後、主イエスを慕っていた人達が自分たちを襲ってくるかも知れません。その時、あれはピラトが決めたことであり、自分たちのせいではないと言えるようにしておきたかったのです。

ピラトもまた民衆に対し、自分たちの律法に従って裁けと、自分は主イエスの扱いにかかわりたくないことを示しました。ピラトの目から見て主イエスは

無罪だったのです。そして民衆が訴えているのはねたみのためであることもピラトはわかっていました。しかしピラトは彼らの訴えを退けませんでしたし、拒否もしませんでした。これは私達にとっても不思議なことに思えますけれども、政策上大きな失敗を三回していたのです。民衆はピラトの弱みを握り、時としてピラトを脅迫したのです。このすぐ後民衆は、ピラトがもし主イエスを許すのならば、あなたはローマ皇帝の味方ではないと脅され、ついに死刑の判決を下してしまうのですが、これは政策失敗が大きく影響していたと言われております。当時ユダヤ人に対し強大な権力を持っていたピラトでしたが、人間的には民衆と同じ責任転嫁をするだけであり、自己中心の罪を持った人間であったのです。

このように主イエスを十字架に付けたのは、人間誰もが持っている自己中心の罪の故でした。この裁判の様子は、私達人間社会でいくらでも見ることが出来る日常の姿です。そして私達が自然に行っている姿です。自分の形勢が不利になれば自己防衛をし、自分に責任が降りかかるのを防ぐ、そして自分を妨げる者や戒める者があればねたんだり除外したりしようとする。それは私達の世界で決して特別なことではありません。主イエスを十字架につけたのは、私達が普段持っている罪の心、自己中心の姿が主イエスを十字架につけたことを本日の福音書は語っています。

そしてそのような人間の罪の前に主イエスの堂々とした態度が印象的です。責任転嫁をし、人の弱みを自分の利益のために用い、ねたみの故に人を殺そうとする人間の前で、主イエスは堂々と正しいことを述べられました。自分が救い主として神から遣わされた者であること、そしてやがて来たるべき神の国において、主イエスは王として君臨なさる存在であること、それをはっきり示されました。人間たちが持っていた不自由さとは対照的です。そして主イエスは十字架にかかれましたが、そのまますべてが終わったわけではなく、三日目に復活され、人間の罪を打ち破って勝利を治められたのです。神の国は必ず実現することを、主ははっきりとご自身をもって示されたのでした。私達の持っている罪は最後に滅ぼされ、永遠の命が与えられる、私達の一番の希望を与えてくださったのです。

本日は今の自分の姿をもう一度よく振り返り、主イエスの姿をしっかりと受け止める日であります。主の救いの業をよく心に留め、新しいスタートの土台としていきたいものであります。